

京橋の印刷

3月30日 1998・No.100

東京都印刷工業組合京橋支部
〒104-0041 東京都中央区新富1-16-8
日本印刷会館3F 電話 3552-1855
FAX 3297-3790

発行人 十文字 康雄

100号記念特集号



和して同ぜず

支部長 十文字 康雄

私は以前人生の幸福、重大事は、自己を目覚めさせてくれる機縁、人々との本当の出会い、即ちそれを邂逅といい、それを得た時の謝念を大切にしていきたいものと書いたことがあります。ほんのわずかでも己を啓発し、眼を開いてくれる人に、あるいは一切のものに感謝する、世の人々が互いにそう考えるならば、そこにはまことの平和が訪れ、人間の真の協和も可能なのではないかと思うからです。そして「和して同ぜず」。各々が独自の心をはっきりもつて、決して妥協はしないがしかも仲良くできるならば、これは人間の理想にちがいません。しかし私達は多くの場合「同じで和せず」です。妥協し外見上は仲良くしていますが、心の中では反撥したり嫉妬したりひがんだりしています。人間の悲しむべき姿ですが、そのために人生を否定してみてもはじまりません。人生は悪意に満ちているようでいて、どこかに善意はあります。どんな人間の裡にも一片の善意はひそんでいますし、それに邂逅することは喜びであり、たとえささやかな喜びであってもそのことが私達に生き甲斐を感じさせてくれます。

「この命なにをあくせく、明日をのみ思わずろう」ような毎日ですが、そうであっても前途に一筋の光明と生き甲斐があることを信じて、人は健気にも闘い続けていくもののようにです。

京橋支部も創立75周年になり、「京橋の印刷」も20年で100号に達しました。この歴史は支部運営にたずさわった多くの人々の祈念の累積だといっても過言ではないと思います。ありがとうございます。

「京橋の印刷」100号発刊記念 座談会



100号迄の歩み を振りかえり—



●創刊号

《出席者》

アイウエオ順

- 大 竹 次 郎 (株)大竹印刷所
- 神 林 克 明 神林印刷(株)
- 久保田 幸一郎 東京眞宏印刷(株)
- 白 橋 達 夫 (株)白橋印刷所
- 新 保 義 人 (株)大成美術印刷所
- 瀬 戸 恭 平 (株)昇寿堂
- 土 井 嘉 光 (株)典文社
- 中 村 憲 吉 日本精版印刷(株)
- 水 野 雅 生 ミズノプリテック(株)

(執行部)

- 支 部 長 十文字 康 雄
- 司 会 榎 本 則 義



＜執行部＞
十文字支部長

十文字支部長 来る五月十八日の通常総会をもつて、水野執行部へバトンタッチすることになりました。残るところ三カ月ですが、先だつての新年臨時総会でも申し上げましたとおり、ことしが京橋支部の創立七十五周年に当たり、『京橋の印刷』も九十九号まで発刊が終わりまして、次回がちょうど百号発刊を迎えることになりました。そこで創刊号はいつ頃出たんだろうということからこの座談会開催の話が出てまいりました。本日は約二十年前の創刊当時の支部長の久保田さんをはじめ執行部の方々、また節目々々で精力的に編集に携わっていらした関係の皆様を煩わせましてご出席を賜りました。

百号記念発刊でございますので、先だつての総会で表紙の全体写真を撮影いたしましたのですが、内容も記念号にふさわしく中身の濃いものに仕上げたいと考えておりますので、きょうはどうぞ忌憚らないお話しを承りたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

司会 ただいまの支部長のご挨拶のとおり百号記念号を発刊することになりました。本来ですと歴代支部長、あるいは一号から百号までにお骨折りいただいた関係者の皆様にお話を伺うの



＜司会＞
榎本副支部長

が筋ですが、諸般の事情もありますので本日は限られた方にお集まり願ひしました。二十年前に廻ることもであり、厳密に記憶に定かでないというのが実情かと思ひますが、よもやま話というか気楽にお話しただければ幸いです。

座談会の進め方ですが、大きく三つぐらいに分けて伺いたいと思ひます。一つは創刊に関して産みの親といひますか、井戸を掘つてくださった創刊当時のお話し。それから一号、一号の積み重ねで百号に至つたわけですが、その間いろいろと苦勞もあつたし、内容も変わったかと思ひますが、特に大きく転換した節目の当時のお話し。それから現在に至る最近の支部報の状況と今後の課題。こんなところで話を進めてゆきたいと思ひます。

早速ですが、まず百号を迎えたということ、久保田さんの感慨はいかがですか。

百号まで続くなどとは
思いもよらなかつた

久保田 私は皆さんよくご承知の出来の悪い支部長だつた久保田でございます(笑)。
今度、支部長さんと榎本さんから、こういう

座談会があるからゲストでということできようまかり越したわけです。資料として創刊号から四号までのコピーをいただき拝見しながら感じたことは、最初はともも百号なんて出るか出ないか、全然出ないほうが可能性が多かつたような感じでありました。創刊号これは慌ててつুকつたんです。何とかしようじゃないかということとで慌ててつুকりました。四号までは私の任期中にやつたわけです。その結果、その後の支部長さんをはじめ執行部の方々にはかえつて重荷を押しつけたような感じで、非常にご迷惑をおかけしたんじゃないかと今になってみると思ひました。しかし一面、こうやつて百号まで出ますと、やつて良かったなあというような気持ちもいたしますね。やらないと百号も出ないわけですからね(笑)。

あらためて百号まで皆さんのお骨折りをいただいたことは、まことに感謝に堪えないと思ひておりますし、これもひとえに皆さんの組合を愛する精神で続いたんじゃないかと思ひます。

司会 創刊号発刊が五十三年の一月です。それから五十二年から準備されたと思ひますが、瀬戸さん五十二、三年当時の印刷業界の状況というのは



＜湊地区＞
久保田幸一郎氏

どんな環境だったのですか。

瀬戸 私はどっちかという記憶力が悪いのかな(笑)、あんまり昔のことをあだとか、こうだとかいうのは苦手なほうなんです。当時はオイルショック以後の不況が現在のよう長期間続いていたと思いますが、そういうことについてあんまり正確にどうか、皆さんもあそびだったなと勝手に記憶を蘇らせるような話しはちよつとできそうもないですよ。ですから、代わりにそのときの我々の支部の状況はどうだったかということに誤魔化させていただきたいんですが(笑)。

私は支部の役員というのは、地区で幹事をやるとか地区長をやるとか、勉強しながら副支部長になるのが普通皆さんのやり方じゃないかと思うんですけども、私の場合はいきなり副支部長にさせられたんです。私は工場から本社にきて間もなく、二年ぐらいかな、いきなり副支部長をやれといわれまして、訳もわからず執行部になったんです。そんなことで私自身としてはあまり自分の仕事とかなるべくしないうちに、支部長さんがあんまり張り切らないように(笑) というような、そういう形で支部に参画



〈銀座地区〉

瀬戸恭平氏

したというのが実情です。

さきほど久保田さんは非常に謙遜されておっしゃいましたが、実際はそうではなくて大変意欲的な方で、『京橋の印刷』を創刊されましたし、またここにある物故者の顕彰額、これも久保田さんが初めて作られたんですよ。とにかく久保田さんはそういうことで非常にいろいろのことをなさるんで、実は私はハラハラしていたんです(笑)。私は原稿を書くなんて大変苦手ですし、また、それを編集するなんていうのは本当に私にとつて考えられないことなので、とにかく発刊したんですから、自分たちのやっている間はよろしいけれども、引き継がれた方で私と同じように苦手な方もたくさんいらっしゃるのでは、これはいつかは終わるんじゃないかなあと、正直思っていたんです。実はその後もう一回内容がガラツと変わったとき、児玉さんの執行部だったと思うんですけども、そのときなんかはむしろやめたほうがいいんじゃないかと言おうと思つたぐらいです(笑)。そのほか思い出としては途中で書記の交代がありましたね。それがこの間まで務められた岩本さん。岩本書記は随分長持ちしたんですけれども、そのときの採用試験なんかは私も立ち会つただけけれども、実にハラハラしたんです。というのは、前任者が岩本さんに対して、お茶を出したり一生懸命やっているんです。気がついたらどうも私の代わりにこの人が来るらしいって、後で怒っちゃいましたね(笑)。

司会 内緒だったわけですね。いまお話しに出

た顕彰額ですが、支部五十周年のときに分厚い京橋の記念史が出て、その後の事業ということで顕彰額と支部報の発刊があつたとらえてい

るんですが。
久保田 そのときもやっぱり日数がだいぶ迫つてしまってますね。日にちがみんな裏側に書いてあります。

瀬戸 最初はあんないっぱいじゃなかったんですよ。上の四段ぐらいまでだったかなあ。

久保田 そんなにいつてなかったよ、一番最初は、二行か三行ぐらいだった。いつのまにかこんなに増えてしまつて随分淋しい(笑)。

司会 それで支部報発行の機運が出てきましたのが、『京橋の印刷』発行前というのはどのような形でインフォメーションがなされていたんですか、白橋さん記憶ありませんか。

「京橋の印刷」以前は 簡単な「印刷時報」を配布

白橋 私は当時まだ執行部じゃありませんので定かではありませんが、ただうちの父が支部長のときに南さんという人、たしかうちの父が連れてきたのじゃないかと思うんですが、B5判両面位で昔流にいえばガリ版のような、瓦版じゃないけどそういうのをつくつて配っていた記憶があるんですよ。

司会 これはやっぱり印刷したもので？

白橋 印刷だったかガリ版だったか、印刷となるときはちゃんとしますよね。そこまで手の込んだものじゃないんですが、要するに口で言うより



〈八丁堀地区〉

白橋達夫氏

も確かだからつくって配ろうとやっていた記憶があるんですけど。そのころはまだ黙って見ていたんですが、かなり前の話ですね。体系だって一つの形としてされたのはもう久保田さんですね。

久保田 その前に時報というのがあったんです。『印刷時報』。それはA五判の二つ折。それが毎月、毎月出ていましたね。それが一番最初ですね。そのことをおっしゃっているんじゃないかと思うんです。

白橋 だからタイトルも何もわからないんですけど、要するに口で言うよりも確かなんだと、今から見ればまあチャチャな話ですよ。しかし、情報を的確に伝えようという意気込みというか、姿勢だけはそういうことだったのではないかと。

久保田 そういう点から見ると当時の組合員と今の組合員と比較するわけじゃありませんけれども、当時はそれほど組合というものの考え方が今よりも真剣に考えていた時代じゃないかと思うんです。今が真剣じゃないとは言いませんけれども、やっぱり時代の流れでしょうかね。昔は昔風の人がみんな集まっていたわけでは

よ。現代は現代風の人がたくさん集まってほとんど中核を成しているわけですよ。そのへんの環境が違うんじゃないでしょうかね。

したがって組合のあり方というか、運営方法とか対組合の考え方というのは時代とともに変わってくるんじゃないでしょうかね。

白橋 ただ組合に対する意識といっても、確かに近所ではコミュニケーションがついていて仲間意識はあっても、組織としての全体的なメンバー意識となると何ともいえない。まあ当時隣近所は結構仲良かったですがね。

司会 大竹さんの見方はどうですか。
大竹 それはやっぱり親父と子供の意見が違っていると同じように、年代が変わればやっぱり違ってくるんじゃないですか(笑)。私は百号までいって、編集したり何かした人も大変だけど、これを印刷したのも大変だと思うんですよ。プロが見る本ですからね。なかなか原稿も集まらない、時には裏方の書記がああでもない、こうでもない言ってるね、それでも日にちは間に合わせなきゃならない、白橋さんのところのようにやきもきしながらもサポートしてくれたところがあつたから続いたんであって、ただ銭金の問題じゃ



〈新川地区〉

大竹次郎氏

なくて、そうした努力も百号まで続いた一つの大きな支えじゃないですか。

支部長 おっしゃる通りです。

白橋 別に私のところは何もたいしたことなくて、要するに原稿のフレームを埋めていくだけですけれども、今いないから言えますけれども、某氏の原稿というのが原稿じゃなくて、ただその雰囲気があるだけなんです。ですから、てにをはとか誤字、脱字を全部もう一度書き直しましてね、それでやらないと原稿にならないんですよ。しかし、本人は一生懸命ありのまま書くんですが、それは本人の感性の問題ですね、口で言うのと文字に表すのとは全然雰囲気違ってきますので、そういうふうにして。支部長 当時は毎月発刊でしたね。それが立派だなと思うんですが。

当初は月刊でスタート 印刷は活版で

久保田 はじめこれを隔月にするとか、三カ月に一回の旬刊とか季刊にしようとかいろいろ相談したんですが、私があるときにちよつと強引だったんですけども、どうせやるなら毎月やらなくちゃ駄目ですよ。飛び飛びにやったら、元、なくなっちゃう元だと。だから、やるんだったら毎月、月刊でやりましょうよということでも月刊になったわけです。やった方は本当にお骨折りで大変でございましたけれども、しかし、それだから続いているんじゃないかとも考えているわけです。

司会 『京橋の印刷』というタイトル、今もこれを使っていますが、これはどなたがお考えになったんですか

久保田 東京の印刷があつて、これをもじって自然にこういうふうになっちゃった。

司会 予算面の苦労はどうでしたか。

瀬戸 予算があるから出すというんじゃないやなくて、そういう相談は全くなかった(笑)。

白橋 予算は私の想像ですけれども、そのころまだかなり潤沢だったと思いますね。

瀬戸 カネは持つてましたね。

支部長 三百何十社あつたでしょう、組合員も白橋 それとやはり、広告収入もありましたからね。

新保 久保田さんね、創刊は久保田さんが支部長の最後の残り三カ月ぐらいから始まったんですよ。当時、えらいものをまたつくられたな、大変な置き土産だなと(笑)。あとの人はどうしようかというお話しが、確か石曾根さんや田島さんなんかからあつたのを私よく覚えていますが。

久保田 だからいま謝っているんですよ(笑)。新保 この後の支部長は小宮山さんになったん



〈湊地区〉
新保義人氏

でしたね。

久保田 小宮山さんには何もかも全部置いてっちゃって非常にご迷惑をかけたことだろうと思います。

神林 印刷は最初はずっと石曾根さんのところで活字でやられていて、それからコールドタイプに移ったようですね。

司会 四十二号ぐらいまでは活字ですね。それ以降オフセットに変わった。

神林 やはり活字よさようならじゃないけれども、コールドタイプよ今日は、という一つの節目だったのかなあとも思います。

新保 構造改善によるちようど転換点だったわけですね。

司会 それはまた後ほど何うとしまして、当時の記事の集め具合とか、内容構成で採めたりとか、苦労したということはどうですか。

久保田 内容については、やはり支部報ですからニュース的な素質があるわけで、組合つまり京橋支部のなかのニュース的なものを第一番に取り上げたわけです。取り上げる内容についてはみんなで会議して決めたんですよ。報道といえますかニュース関係、それからお知らせとい



〈新富地区〉
神林克明氏

ったようなものを主にしました。

白橋 そういう意味合いがあつたから、当時支部長はニュースが古くなつてはいけないということで、毎月ページにかかわりなく、二ページでも三ページでもいいんだと。とにかく毎月知らせようということだったんじゃないかなと思ふんです。えてしてページが八ページにならなきゃならんとかこだわって遅くなるということ意味合いがなくなっちゃうから、ということだったんじゃないかなと思ふんですけれども。

久保田 あんまり原稿が集まらないようだったら、そのなかの一ページでも二ページでも費やして何か小説でもどこかに依頼して、毎月流したらどうだろうということも考えた。それはちよつと否決されましたけれども。

司会 表紙の写真は京橋地区にかかわりある歴史的な古い碑などを詳しい解説をつけて追っていますね。

久保田 書記の人が写真を撮って、そのためにカメラを一台買ったんです。いま残っているかわかりませんが、カメラを一台、ゴロゴロしたやつを(笑)。

司会 毎号撮影してきたわけですか。

久保田 撮影してくるわけですよ。そんな必要もあつて書記を替えたわけですよ。岩本君になってから、撮りに行ったり何かするのはマメな男だったから、よくやつてくれた。

司会 内容的に見ますと、小宮山さんの時代に入つて組合学校というタイトルで伊坂さんが八回連続で執筆されました。そのあと水野さんが

ミズノコレクションシリーズを十回にわたって連載されました。記事を書くという立場からその当時の思い出話を水野さんいかがでしょうか。

水野 私は実は自分の持っているものを媒体としても書いたのはこの『京橋の印刷』が初めてでして、自分自身の勉強になったというところで、今考えてみますと非常にありがたかったなと思います。私が印刷の歴史について興味を持ち出したのは学生のころだったんですが、当初はルーツを調べてはおりましたが別にコレクションをやるなんて大それた考えは全然なかったのです。資料を集めているうちに、自分の身の回りがその資料でいっぱいになり非常に汚い状況になりました、ある日友人が来てこれはお前死蔵だと、空気入れろと、部屋を開けろというようなことから、空気を入れ替えたりしているうちに、これは人に見せないとお前が自分で持っていたってどうにもならないんだぞと言われて気がつきまして、じゃあ一般的に皆さんに見ていただくというような施設をつくったわけです。そのときがちょうどこの『京橋の印刷』とかかわった最初でして、やはり少しでも



＜入船地区＞
水野雅生氏

印刷の歴史を自分だけのものじゃなくそういう形で皆さんに見ていただき、あるいは勉強していただくことによって、少しでも役に立てばという気持ちになったわけです。それで、これを少しづつ書かせていただいて十回になりました。それが後に私が印刷の歴史を綴ったものにもまとめ上げることができたわけで、いま考えてみるとこの『京橋の印刷』はありがたかったなあと改めて気がついたわけでございます。その後印刷の始まりであるバビロニア出土の円筒印章から、近代印刷に至るまでの代表的なものをシリーズでカラーで表紙を飾らせていただきましたが、白橋さんをお願いして私どもの関連会社で製版させていただいたのを覚えております。

司会 発行回数を追っていきますと毎月の月刊が約二年半位、三十号あたりまで続き、その後諸般の事情からそれが隔月発行に段々なつていったわけですが、その一方で児玉支部長時代に大変大きな紙面転換がありました。四十三号からで、きょうご出席いただいている新保さんと中村さん、そして表紙に関しては土井さん、皆様の時代なんですけれども。まず一つは表紙が土井さんの写真と解説つきのカラーになり、組み方も三段でオフセット印刷に。

表紙をカラーに 大きな紙面転換を図る

新保 私どもが担当したのは四十三号から五十四号まで約十二回位やっているのかな。先ほど

も申したように、これはえらいものを引き受けたなという気持ちは同じだったんですけれども、やる以上は少しでも役に立つようなものにして、当時私も若かったですからだいたい頑張ったんじゃないかと思えます。編集会議もきちっとやっていたですね。通信員制度をもうけて情報をなるべく集めるようにしようとか、一カ月おき十五日には必ず発行しようとか、だいぶ約束をしているようです。一つ忘れていましたけれども、広告をカラーにしようということだったんですね。表紙もカラーに、これは古い地図を土井さんから提供していただいて、しか



もずっと表紙の原稿も書いていたでいるんですね。明治時代の記事から京橋区でしたっけね、あのころは。古い地図とか、そういうのを表紙に使っているいろいろ解説してもらいました。カラーにするとお金が高くなっちゃうので、近所から広告を取ろうということをやっていますね。近所の喫茶店とかいろいろお店の広告を皆さんに取ってもらって広告料をいただいたわけです。

司会 中村さんはいかがですか。

中村 すべて新保さんの企画とアイディアです。さつきおっしゃいましたけれども引き受ける以上はちゃんとやらなきゃいけないと。私はただ付いていただけです。おっしゃるような紙面一新をしたんですよ、確かに。広告もそれぞれの推薦者の言葉が何か入れて。

新保 あそこのコーヒーはおいしいとかね(笑)。

中村 新保さんの会社の吉田さん、彼女が編集・割り付け・味付けなど紙面づくりの実務を一生懸命やってくれましたね。

司会 土井さん、表紙をお引き受けしたときの思い出話はいかがでしょう。しかもカラーに変



＜新富地区＞

中村憲吉氏



＜築地地区＞

土井嘉光氏

わったという一大転換なんです。

土井 思い出といえば例の児玉さんの小さな内閣、得意なアレですね。小さな内閣であんまりお金を使うようなことはしなかった。それから隔月皆さんに幾らかでも読んでいただけるといいうことで、京橋中心に何かカラーで表紙に使えるものはないかとのことで私がたまたま映画とか芝居の資料を少し集めておりましたのでじゃあそっちのほうは何とかしましょうと。表紙の文章も新保さんのところで二回か三回、まとめて書き合わせるといいうことで、全部新保さんのところですよ、製版から印刷まで。

瀬戸 私はそのとき会計をやっていたんですよ。今おっしゃったように、児玉さんはなるべく何もやらないようにというようなことで(笑)。ところが今支部報は立派になったけれども会計的にはそれでもどんだん繰越金が増えていった、そういう時代でした。ですからそれらにもお金をかけられたんだと。なおかつ広告も取りましたから。そのあとが小葉さんかな、そのときにこの支部の部屋を模様替えしました、そのときもだいたい資金がたまっていたんだと思うんです。だから児玉さんの、ある意味で

は実績だった(笑)。

司会 印刷も先ほども一寸話が出ましたがロードタイプに変わった時期ですね。

新保 あのころ構造改善の時期で、ロードタイプに変えなさいということで、タイプストですか、あんなのを皆さんがお使いになった。この「京橋の印刷」は写植だったと思います。

司会 写植・オフセットへの転換でカラーへの移行も容易になったわけですね。

中村 やっぱり東京のど真ん中の京橋ですから、表紙ぐらいはカラーにしようじゃないかという話しをたぶんしたんだらうと思いますよ。

土井 ふた昔前というのは随分昔ですね。創刊時代の七十八年といいますが、宮城県沖地震、あれが七十八年。それで東京国際空港がようやく例の反対派のあれを退けて、滑走路一本で開業したのがやはり七十八年。

司会 確か宮城沖地震の記事が載った時期がありましたね。

神林 載ってる。八号の特記記事のところ。

児玉さんのときからずっと変わりましたね。編集も記事もそれから臨時新年号が出たり、年賀状特集を出したり。

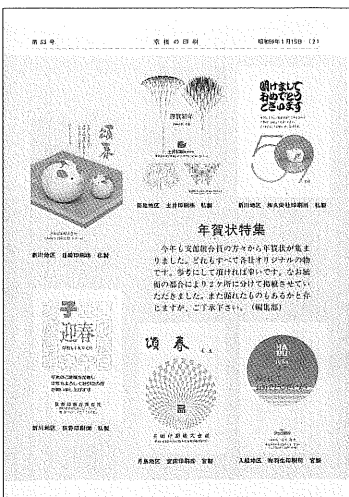
中村 支部各社のオリジナル年賀状特集は皆さんから大変良かったといわれていますよ。

新保 榎本さんね、たまたまこちら四人は児玉さんのときにみんな一緒だった。それで今でも年に一遍集まっているんです。

司会 それはすばらしいですね。

新保 仲が割と良かったものだから。

中村 非常にそういう意味ではいい時代でしたからね。
 久保田 それに比較して私が支部長をお受けした創刊号当時は新しい事業をやるには支部の資



●53号・新年号



金があまりなかったんです、そこで私はどうやって金をつくらうかと。その一つの表れが広告ですね、広告の収入。これも反対される方も

いましたけれども、やはりできるかできないかやってみましょうよということでは始めたところが、幸いにして関連業者の方がみんな喜んで協力してくれた。それである程度の金もでき、事業も多少潤ったんじゃないかなというふうに思っています。

司会 小葉さんの執行部のときに神林さんは尾島さんと一緒に支部報担当副支部長になりましたね。

神林 小葉さんが支部長時代に支部報編集を担当させられました。ご存じのとおり尾島さんは大変実行力と情熱のある方で、私は単にお手伝いをしただけでしたが原稿集めはひと苦労でした。そこで貴重な蒐集品と印刷の歴史に造詣の深い同じ副支部長の水野さんに土井さんのあとを継いでカラーで表紙を担当していただきました。

司会 話が前後しますが、さきほど久保田さんから広告の話が出たところで、小山支部長の時代六十四号から広告をやめました。当時副支部長として執行部にいらした大竹さん、白橋さんからその辺のいきさつを伺いたいのですが。

広告掲載をやめて

自前の精神で

白橋 そのことについては財政的には大変苦しかったと今でも時々話の端にでています(笑)。支部長 武士は食わねどでいこうと？

大竹 やめたのは、広告を継続的に取るということは、結局、年間何回出しますよと約束ごと

をしなきゃいかんと。そうすると、編集をする人にプレッシャーをかけることになるというのがまず一つあるんです。つまりそのとき、そのときの執行部のなかで、たまたまずごく編集とかそういうことに興味と興味とやら大変失礼だけれども、ある程度理解を持ってやっていただける執行部と、全然それがない執行部と、その時々によって全然違うわけですよ。だからそういうことからいくと、やっぱりこれは広告費はいただかないで、たとえ二ページになろうと四ページになろうと自前でやったほうがいいんじゃないかなと。それから、そろそろこのころになると種切れになってきたんですよ。先ほどの久保田さんのお話のように、通達記事というのは比較的出てくるんですけども、それ以外の記事というのはだいたい出尽くしたと。ただ当時、たまたま新聞畑の日報スポーツの近藤さんが執行部に入ってきたんで、責任者を引き受けてもらい精力的にやっていたわけです。このときに表紙はモノクロに戻りましたが、近藤さん独特の感性で今までないような松原友規の水墨画シリーズで好評でした。

ただ、広告をやめるについては、折角今まで骨折ってくれてきたものをなぜやめるのかともいわれましたね。私も聞いた話ですから誰ってことは言いませんけれども、京橋はそういう関連からあんまりいろんなご協力を願わないのが京橋のいいところなんだということ先輩にも随分言われていたんですよ。それが別にこれになつたわけじゃないんですけども、あんまり

プレッシャーを執行部に残すと、なかなかやりにくくなるんじゃないかなということから広告を外して適宜、必要なときに出しましょうということのできたいこんな形になったような記憶をしています。

司会 確かに広告の募集記事を見ますと、半分となっていましたね。

白橋 年何回で六万円とか。そういうふうになるわけですから大竹さんがおっしゃる自前の精神で自分たちでやれるところまでやってみようじゃないかというわけですよ(笑)。

支部長 それがいまだに続いております。

大竹 おそらく東京で各支部が出している支部報で広告が載っていないのは。

支部長 京橋だけです。

白橋 そういう意味じゃクリーンというところですが、自前の精神で京橋はやっているんだという、ちょっと意識が高い支部報なんですよ。

水野 私の住んでいる入舟に「靴業発祥の地」という石碑があり明治になって日本で最初に靴を作った処で、そんなところから郷土史に非常に興味を持っておりますが、特に明治以降の京橋は日本の文明開化の発祥の地なんです。創刊号から目を通させていたところ、ここはまさに文化を発信する街であることが出ていますね。「活字発祥の碑」をはじめ、「八丁堀の由来」であるとか、数多くの名所、史跡が紹介され、各地区の郷土の誉れを盛り込んでいて実に楽しく、こうしてまとまって見ますと、続け

るということは本当に大変なことだけれど、立派なものだと感心いたしました。

司会 久保田さんが創刊のころに、将来これをひもとけば京橋支部の歴史、歩みが明白に判るように、と記されておりますが、まさしくローマは一日でならずの通りです。ところで、自分たちの手作りということで大竹さんの支部長時代に編集が持ち回りで地区担当になりましたね。これが現在まで続いているんですが。

編集担当が

各地区の持ち回りに

大竹 実は執行部の中でもなかなか編集担当者となり手が少なくなつて。以前は執行部の人選でも編集を必要としてあのヒトをいれてくれということもありましたが、だんだん地区の推薦が主体になってきたんです。そんな背景もあつて、本・支部の方針通達や支部員の親睦のほか、各地区が一回ずつ担当し各地区で自由に企画、編集して地区の特色を盛り込んだ支部報にしようというのが主旨でした。

司会 神林さんの支部長時代には支部創立七十年行事が盛大に挙行されました。

神林 記念誌を出したので支部報八十七号は記念特集号とは名付けませんでした。三十二頁というこれまでにない大増頁となりました。それから、いずれは役立つ事もあるうかと「京橋の印刷」の散逸をおそれてこれを機会に上製本に合冊しました。

司会 おかげさまでこの座談会でも大変重宝し

ております。さて最後に支部報の現状という観点から、十文字支部長に伺いますが。

十文字 私は神林・荒川執行部以来今日まで「京橋の印刷」にズーツと携わってきたことになりました。その立場から申しますと、反省になります。その間日常の忙しさにかまけて事務局書記にややまかせすぎたきらいがあると感じています。大竹さんの時代に編集を地区単位で担当し、その面白さが出ました。ただその後もそのスタイルを踏襲してきた結果、当初の目的、意図が希薄となり、書記まかせのマンネリ化があるなと思つておりました。したがって次期の水野執行部にバトンタッチするにあたり、どなたか執行部の中から編集責任者をお選びいただくなり、ご配慮願えればと思つております。

新保 インターネットの進展で支部報の形も変化してくるでしょうからね。

水野 十文字支部長の意を呈し、また百号という「京橋の印刷」の伝統を背負い頑張つてゆきたいと思つています。

司会 水野執行部の百一号からに期待して本日の百号記念座談会をこれで終了させていただきます。長時間にわたりありがとうございました。

「京橋の印刷」百号記念 各地区一筆啓上 主題不問随意

(有) 山崎屋東商印刷 山崎隆三

銀座地区

昭和三十一年の地区親睦会 の再結成当時にさかのぼり

「京橋の印刷」が百号目を発行することになった。その記念記事を各地区で書くようにとの事で早速地区会を開き長年に亘って地区で保存する資料を開いてみた。それによると地区親睦会が昭和三十一年に再結成され設立趣意書とともに再開第一回の旅行の集合写真が出てきたので、折角の機会であるのでその全文を原文のままご披露させていただきます。

この文章が何方によって書かれたのか、ここに記されている旅行委員の方々は今は全員支部の顕彰額の中に入られてしまったので知る由もない。二世の方達の評価では文集社の宇留野氏の筆によるものではないかとの事である。

又このころ東京都印刷工業組合では余りの競争の激化から印刷調整組合を別途設立し競争をコントロールしようとしたらしい。

戦前からの人達が業界を再建し、折からの高度経済成長とあいまって誠に意気盛んな様子がこの漢語調の文章から偲ばれる。

昭和三十一年六月六日には株価が天井知らずで東京株式市場はダウ平均株価を初の500円台に乗せた。民間企業の設備投資が実質で対前年度比4割りも伸びたのである。

印刷業界も他産業に負けずにおおいに設備投資が行われたものと容易に推測出来る。こうした経済事情を反映して、七月十七日には経済企画庁が経済白書を発表し「もはや戦後ではない」と強調した。

「日ソ共同宣言」調印を



花道に境界引退を表明した鳩山一郎氏に替り、十二月二十日には石橋湛山氏が首相に指名され二十三日石橋内閣が成立した。この自由言論人宰相の誕生に国民は大いに期待したが組閣から僅か六十三日で総辞職した。

この他印刷出版界では非新聞系の「週刊新潮」が出版されその後に続く週刊誌ブームの基となる。

昭和三十一年刊行の東京都印刷工業組合の組合員名簿は縦書きで、旧2区では5社が又3区では25社が記載されている。電話の局番は5

有史以来嘗てなき大東亞戦より終戦迄の奇烈なる時の流れはさしも鼓威を誇つた中小企業者をして殆ど壊滅に近き迄転蹙業の止むなきに逐ひこんだ

我々印刷業者も亦その増外に在るを到底許しなかつた勿論三區親睦会の存在など望むべくもなく遂に自然解消の途にたつた然し戦後後速早くインフレの重圧とあらゆる隘路の立ちはだかち中散然と父祖の業を再興する者漸く相次ぎ戦前を凌ぐ今日の隆盛とみつきある事口御同慶の至りである

茲に同業者有志相集い銀座東山本祝町一帯の印刷業者及関係業者と結集し三區親睦会を再建し住時に逐色なき友愛精神による強固なる團結と組織を得た事は誠に欣快に堪ない処である其の團結に於て其の行動に於て他地区業者の筆も刻目する所あり亦比肩するものなきを誇るものである

昭和二十八年より第四回親睦会旅行會を催し以來四年を重ねる事六回毎春秋二季之行熱海に相根に亦伊東熱川に更に長駆して信州松本長野に及び其の間需然たる零圓氣は愈々會員間の結束と密に入り入會者又理と接する感況である

本日旅行記念写真帖を編すに当たり転た感慨なきを得ない時冷も印刷調整組合の発足あり願くはこの友愛の精神と團結の熱意と結集し調整組合の完全なる運営に協力せん事と!!

終りに臨み井上キヤムマン氏の労を多とするものである

尚貼付写真及解説に順序の誤謬亦は失禮の致あるも知れず乞ふ恕するに寛をもつてあれ

昭和三十一年春
旅行委員

- 冬水印刷 永島冬二
- 橋本印刷 橋本康正
- 文集社 宇留野市郎
- 山中印刷 外山博
- キヤムマン 井上製版
- 井上製版 井上登雄

6局と54局である。この中にはその後他地区に移られたり又組合を脱退してしまつた方々もいる。

さらに下つて昭和四十五年刊行の組合員名簿では、旧2区が4社、旧3区が27社記載されているが、四十六年の名簿では2区と3区が合併されて銀座地区となつている。その為親睦会も大変盛況だつたようである。

昭和五十三年九月十五日発行の「京橋の印刷」に文海堂の松岡繁夫氏、松栄印刷工業の松木仁司氏、橋本印刷の橋本康正氏、東銀座印刷の大橋忠治氏が「銀座の印刷」と題して座談会を記載している(橋本・松木氏は故人)。それによれば銀座は印刷発祥の地と言われるが旧3区の本町の事であるとしている。尚、昭和四十七年刊行の「京橋の印刷史」に詳しく記載されているので一読をお勧めしたい。

東京都印刷工業組合の1998年版の組合員名簿では銀座地区は20社で準組合員1社を数えるのみとなつてしまつた。減少の原因は色々考えられるが、この親睦会再興の時と比べると寂しい限りである。

しかしながら先輩諸兄から受け継いだ伝統を護り毎月例会を開催し、これも年一度と減つてしまつたが関連業者も交えた親睦旅行も行つてゐる。

この項の終わりにあたり先人の業績を称え感謝するとともにあわせて故人となられた方々のご冥福を祈りたい。

京橋地区

(株) 金陽社印刷所 細田益蔵

一〇〇号まで

思いつくままに

「京橋の印刷」創刊の昭和五十三年頃はどんな風情の京橋だつたらうか。二十年前を振り返つてみると、兎に角不況の後で、一筋の好況になりそうな明かりが見えた時のように思われる。四人の名幹事

この頃京橋地区より京橋支部長に小宮山印刷(株)の小宮山敬之社長が就任された。小宮山社長は当地区でも非常に組合員の和を唱え、運営への積極的な参加を呼びかけ、組合員全員の発展と向上の為に総会、各種会合で交流の場を通じて自分の企業の進路をくみとるべきと我々組合員に話をされた。副支部長には日英舎印刷(株)の山田明光社長が就任して支部運営に貢献され、京橋地区組合員に小宮山支部長の意向を伝え、不況時も明るさを失わないように、不況から抜け出す為に地区内の仕事の交流を行い、互いに不要な設備の増加の防止を心懸けた。これらの意向は区長の秀秀堂紙工印刷(株)の坂田利正常務と三徳印刷(株)の尾島賢一郎社長に伝えられ、組合員の体力維持と景気回復に備え、四名の強力な指導力と先見性で十三社の脱落を防止した。この幹部のお蔭で京橋地区の組合員は堅い結束でこの時の不況を克服した。

尾島氏、京青会初代会長に就任

昭和五十四年六月八日「京橋支部印刷人青年会」の発会式が盛大に挙行され、名誉ある初代会長に尾島社長が就任されたことが、彼の人格を如実に現している。と同時に小宮山社長のこれからの時代は二世、三世の若い力を組合、業界に結束させねばならない。そして業界の若返りを計り、印刷界の新技术を取り入れ、印刷の革新化に弾みをつけ、設備の更新を行い、社内に活気呼び、今回のような不況に落ち込んだ時に右往左往しない体質を造るよう適性工賃の確保をしなければならぬという尾島会長の思想を実現するべく京青会を力強く船出させた。技術革新の時代に入る

長い歴史を創り上げた活版印刷も自動化を最後に、各社とも平版化に移行し、それに伴い電算写植、写植機、自動組版機など新機械が出現し、非常に広い選択肢があり、平版專業の方々にどれが使い勝手が優れているかという相談が各所に興り、これによって活版專業と平版專業との交流が密になり、垣根が取り払われ組合のあるべき姿が確立され緊密になつていった。活字の変化に伴う問題

活版の重要な活字に関わる問題つまり文字の力強さがなく、字面が大きい、その上露光の均一性がなくて文字が細かったり、太つたりの技術的な問題も重なつたが、これらは使用者の我々とメーカー側の技術者で額を突き合わせながら、電子部品の改良や新型機器の誕生で解決した。しかし感覚の問題は未だに解決しない

が、文字製作者の作品コンクールとか自社開発の文字提供などで着々と市場を開発し、デザインの中の文字が表現の意味を主張し、文字はコンピュータでなければならぬ時代になってきた。この流れによって活版業者は活字よサヨウナラといい、殆どの活版業者はオフセットに移行した。ゲラの運搬はなくなり、活字もなくなり、作業場は広くなり、従来の組版場は見違える明るさとなり、新しい息吹きが感じられ、伝統ある活版に強烈な衝撃を与え、印刷の環境はすっかり変わり好況に向かって進んだ。

技術と電子の利用
電子技術の発達とコンピュータ、プリン

地区地築

(有) すのはら印刷所 春原英夫
「京橋の印刷」一〇〇号
の発刊によせて

我が京橋支部の動脈「京橋の印刷」が発刊以來、号を重ねてめでたく第一〇〇号を迎える佳節に至った。

しかし、皮肉なことに今や印刷界、とりわけ小企業の印刷業界は不況のどん底にあって、毎日、毎月の仕事の手配、資金繰りの遣り繰り算段に明け暮れているこの現状では、おめでたい一〇〇号発刊の佳節と聞いても、それどころではないよと言う気分の人も多いことと思われるが、何を嘆いても時は無情に過ぎて行くので

ター、カメラのデジタル化など機器の進歩は目を瞠るものばかりで、これらを印刷界で利用すればコストダウンの最良の設備、装置と位置付けて種々検討を始めた矢先、バブルの崩壊と経済の混乱になり、コストの上昇から纏まった仕事は海外に流れ、リピート品まで競争入札など不況の時代の再現となった。以前「造注」という思想が出たが、これをもう一度その気になって実行しなければならぬ。また温室のような印刷界も、今後はオンデマンド印刷、プレートレスなど新しい技術を真剣に考え、社会のニーズに対応できる組合に成長しなければならない。

ある。不況は不況として、自分なりに印刷業人生を振返って見ることも、一〇〇号の佳節到来の一時代の思い出となるのではなからうか。

私が印刷組合とかかわりをもったのは昭和五十九年頃からであった。その頃我が築地地区では小森印刷さんが地区長を担当されていて、地区の集まりに私の父が出席した折、小葉支部長が見えられて「そろそろ息子さんを組合の方に出して下さいよ」と言われたそうで、その旨父から話を聞いて汲々ながら組合の集まりに出て行くことを余儀無くされた。我が社は昭和二十年代後半よりオフセット校正印刷を生業としていたのだが、昭和三十年代に入って手差しの印刷機を導入して印刷屋の仲間入りをした。四十年代に入り熊谷印刷さんの柴沼氏のお誘いを受け組合員の仲間入りをさせていただいた。私は

と云えば、当時は何の魅力も組合に対して感じておらず、組合参加にはむしろ反対の立場であった。

昭和五十年前後のいわゆるオイルショックの大不況の時は、特に力強い営業力をもっていなかったで困り果てていたが、組合員の仲間が少なからず同情していただき、何かと仕事を廻していただき、何とか生き抜いて来た。

漸やくの思いで食べてゆくことに汲々として、あくせくしている時に、組合の宴会なんかによく行けるものかなと白けた気分が父親を見ていたが、当時の幹事さんが、共に頭を下げて組合員の工場を廻してくれる努力をしていたことがあり、組合員同志が助け合ってくれることは有り難いことと感謝したこともあった。

人間、思いを忘れたらおしまいである。父親が組合に入って、何か仲間の飲み会だけに誘われて酒を飲んでいただけで、何のメリットもないではないかと軽蔑していたが、昭和六十年頃、色々な人に説得され、近藤地区長のもとで地区幹事を引き受けるハメになった。そして何と次期役員改選の折、近藤氏のあとを継いで地区長の大任を受けてしまったのだから人生不詳なりである。

残念なことに、ここ数年来又も到来した平成の大不況、昭和の年代では二十数社を数えた築地村もバブル時代の地上げの影響とバブル崩壊後の不況のためか、組合員は減少の一途をたどり、今や十四社になってしまったことは寂しい限りである。特にこの三年間は不況続きで、私

自身も何度となく組合脱退を考えたことか。何とかここまで来たのも、何人かの語り合える人情熱き友がいたおかげかもしれない。

昭和六十二年度に地区長を拝命したが、本当に名ばかりの地区長で恥じ入るばかりではあるが、大竹支部長の温かい配慮にまもられ何とか務めることが出来たと思っている。

地区長当時の平成元年秋に父が突如他界した。葬儀には築地村の全員の組合員と小宮山さん、榎本さん(故人)等諸先輩の弔問を賜り感謝の念を厚くした。大きな励みともなった。

組合に入れてもらって十数年、そんなにもメリットを感じている訳ではないが、この世に生を受け、たまさか同じ印刷を生業とする仲間達が集まって、情報交換をし、友好を深めはげまし合うことは、極く自然のことであろう。人の世で生き抜く時、人と人の出会い、触れ合いが何よりも大切ではないか。色々な人々との思いも寄らない出会いが人生の転機ともなり得るし、人生に金の想い出を残すことも又出来るのではないかと思うものである。人の世で大事なものは、他人への思い遣りであろう。

職場でも、家庭でも同じことが言えるのではないが、昔の道徳教育の復活を望むものではないが、最近の世の中、人情が薄くなつて行くように思えてならない。「自分さえ良ければ」と思うのは人間の性か宿命なのかもしれないが、それでは世の中成り立たない。

今日の日本の国はと言えば、経済も産業も教育も文化も皆行き詰まって、政界、官界はその

極に達して、二十一世紀を迎えようとしている。これ全て「自分勝手」と言う人間が多くなりつつあると言うことではないのだろうか。情報化社会に追いついて行かねばならないと言う現実があるが、コンピュータ優先の社会より、先ず人情が熱く通い合う社会なり、組織活動が大事であると思うのだが、これ弱者の負け惜しみであろうか。

支部報の一〇〇号近しと聞いて、ひと昔の「京橋の印刷」を捜し出して読み返してみると、昭和五十七年、五十八年のあたりで我が築地地区より土井副支部長が知られて「京橋の印刷」の表紙を担当され、ユニークな誌面で毎号の表紙を飾っている。また昭和六十一年、六十二年の頃は日刊食料新聞社の近藤さんがかかわってその健筆をふるっておられる。十年の昔にはかなり築地地区の代表が支部報発刊に力強い支援をしていたのだと知った。

終わりに、我が築地地区では一番の弱貧な事業主である私が地区、支部の役員にならせていただくことは、この築地の伝統をけがすような思いがして大変はばかれることである。

「京橋の印刷」が次に二〇〇号の発刊を迎える頃は印刷界はどうなっているのか想像も出来ないが、いよいよ平成十年五月より十文字支部長より水野支部長へバトンタッチされるとうかがっている。益々組合員皆仲良くはげまし合つて、支部発展がなされることを祈るものである。

写真は十年前の築地地区の旅行会の記念写真である。二十人以上の組合員が一堂に会して旅

行に行ったこともあったのだとなつかしくなる写真である。



信誠印刷(株) 小林 晃

新富地区

創刊当時の地区会を

回想して

京橋の印刷が昭和五十三年一月に第一号が発行されてから二十年過ぎ、ふりかえって見ますと、当時の景気は余り良くなく大変な時代でし

た。活版の時代からオフセット印刷へと変わって行く時でした。活字の時代は段々終りを告げオフセットに移行する会社が多くなり始め、私は最初からオフセット印刷の為、仲間の方からも多くの相談を受けました。昭和四十六年に会社の住居表示が変わり入船町から新富町になり、この時に新富地区会の皆様と一緒に支部の行事から講習会や諸会議に率先して出席するように務めましたところ大変勉強になりました。当時新富地区の組合役員選出は順番制で幹事が次に地区長に、さらに役員執行部へと順次繰り上げて任期を遂行して行くようでした。この制度は一度は組合活動のお手伝いをする事によって、組合に対する理解を深め、協調、友愛といった好結果を深める事は素晴らしい事で、この行きかたは現在も変わらず実行されているようです。当時の支部長は小宮山氏で副支部長は浅野氏ではなかったかと記憶しております。その当時新富地区親睦旅行や集会の時などで必ず御酒が出る時は、今は亡き諸先輩達が若かりし頃で日本製版(株)の中村謹吾社長と大東印刷工業(株)の常務の鈴木様の間に入りお酒を飲みましたが、量も多く実に飲み方が早くつづぐのが忙しく、おかげさまで私もお酒には強くなりました。お酒については新富地区の三羽がらすと言われました。又当時の講演会のテーマとしては、ワープロが始めて、文字の書体が活字からドット文字で、軽オフが盛んになり、急にコンピュータ、FAXが各社に入り出しほとんどの会社が導入し、伝票の型も変わり連続伝票になり、印刷という

ものが全て変革の時代の始まりのようでした。今から思うとあんな時代があったのかと思われまます。ただなつかしいと言う思いであります。



(株)小葉印刷所 小葉忠 昭

入船地区

入船地区の由来と

地区会の現況

「入船川運河」は合引川と桜川と梅川を連絡した幅六間、延長約二町の川であったという。

江戸時代から隅田川を利用した商人が広く日本全国は基より、諸外国等の物資(文化)運搬に着目して開かれた町が入船町の起源であるという。その後の明治時代に入ってから歴史的人物語りは斎藤正文堂社長、斎藤喜徳氏に記述をお願いした。

入船地区は隣接した湊地区・新富地区と町内会を通じ、また関連業者間との接点も多く、共に隅田川の流れに沿った歴史を共有しながら発展してきた地区である。したがって、仕事の交流も多岐にわたり、また交友関係も家族ぐるみで親の代から続いてきている。

しかし、入船地区は同じ京橋地区で物理的にも条件はあまり大きく変わっているとは思えないのであるが、印刷業者の移動や転廃業の少ない地区である。

聖路加病院のチャペルの先端にそびえる十字架を南端に見上げる町が入船一丁目、二丁目、三丁目である。ここに位置した住居兼工場を持った住民は何故かバブル経済による地上げの誘惑にも他地区のような大きく影響を受けた事例はなく、小・零細ながらも堅実な営業を継続してきている。現在、入船地区の組合員は三十一社で懇親会参加者は二十七社である。当地区では歴史的に地区会と別枠で地区内業者と関連業者を含めた研鑽の場として、入船懇親会と称して継続運営してきている。

最近では地区内各社とも経営者の若返りが進んできた。二世、三世と高学歴の後継者が新しい感覚で小さいながらも個性的で独創的な経営



本州製紙(株)岩淵工場見学研修会入船懇親会 平成6年5月21日

に取り組んでおり、本当に頼もしい限りである。戦前、戦後の厳しい時代を乗り越え、今日の基礎を築いてくれた先輩の努力に見習い、平成の経済危機をダイレクトに受けとめ、京橋地区の地場産業である印刷業の地位を守り続け、発展させて行く義務があると考えます。

当地区では毎年の事業として実施している研修旅行も参加者が増え、ますます内容の充実した会に発展している。写真は製紙工場の見学研修会のものである。

入船地区

(有) 斎藤正文堂 斎藤喜徳

明治初めの入船地区の印刷事情

入船地区は、昔は攝津尼崎の城主、松平遠江守ほか二、三の大屋敷の後だったのが、明治になり隣りに築地居留地が開かれて、地続きのため外人との雑居地域となったため、新しい外国の文化がいち早く導入された。当入船町で大村益次郎の要請により日本で初めて靴(軍靴)が製造され、又、私共に関係のあるものとして、明治初めに英国人のジャーナリスト、ジョン・レイ・ブラックが邦字新聞の日刊、「日新真事誌」を明治五年三月十七日新栄町五丁目(現入船三丁目)に於て発行した。

これは日本で一番早く創刊された「東京日日新聞」より一ヶ月遅かったが、当時、本格的な新聞として政府の信頼を得て、左院御用の免許を与えられ、政府布告の報道に利用された。しかしその後、自由民権運動が盛んになるにつれ、政府による言論統制や新聞弾圧が厳しくなり、明治八年の新聞紙条例の公布によって、外国人による日本語新聞の発行は禁止となり、三年八月で廃刊に至った。

「日新真事誌」が揺籃期にあった日本の新聞に与えた影響は少なからず、新聞史上重要な存在であったといわれている。

印刷業界に縁のあることとしては、ここで印刷した印刷版は版木でなく、木版を一本一本の駒に彫刻した木活字で、創刊時には数千本の木活字を購入し、また彫刻師を工場に雇入れ毎日澤山の文字を彫刻(駒)させた。後にこの木活字を売って、鉛活字にしたとのことである。

編集者として元土佐藩の日野春草を雇い、一ヶ月分の講読料は一両一分で他の新聞より高価であった。

創立者のジョン・ブラックは幕末より明治十年頃迄の維新史として、下関・薩英戦争維新の成功や、佐賀の乱・西南戦争の直前迄、あらゆる情報や記録を集め、事件の真相に迫ろうとする気迫に満ちた「ヤング・ジャパン」上下二巻を出版している。



八丁堀地区

(株) 白橋印刷所 白橋 達夫

道・節目・そして

歩いたあとが道になる。そこから歴史と伝統が生れる。ふりむいて節目となる。

京橋支部が七十五年の道程を経て、そして支部報「京橋の印刷」が広報誌として発行されてから二十年、一〇〇号の節目を迎えるという。喜ばしいと素直に感じたい。どのような経緯で、他支部に先駆けて？発行されたかを知るよりも、寧ろ先人諸先輩の強かな氣力と継続の熱意に衷心より敬意を表したい。

活字が渡来して一〇〇有餘年、時の流れの中で組織化されてより今日まで、それぞれの小さな第一歩、その足跡が幾多の障壁を乗り越え、企業として、産業として幅広い大きな道となり、印刷は今日社会生活に絶対不可欠なものとなっている。

時に変化改革あり。これから先、どの方向にどんなスタイルで歩を進めればよいのか、眼前に道はない。未来に向かって挑むだけ。

過ぎ去った情報の平面的、アナログ的な道(処理方法)はデジタル化によって立体感のある印刷道路ができる様相に変わってきた。これから印刷人が一〇〇年かけて築いた道も、どこからでも、誰もが参入しあるときは協調して、またときには競合しながらの道づくりとなってきた。

た。

これからは曠野に例えるなら、フェアウエイを見つけて歩む人(企業)ブッシュに立ちほだかれてサイドステップをする人、水辺に立ち往生する人もあるだろう。しかし印刷と名のつく道は限りなく築かれて行くことでしょう。

組合情報の伝達、広報の一手段として支部報が継続されていることに重ねて意を新たにし、歴史を刻み、正しい文字の使い方、文字による紙面のデザイン等々それぞれ担当された労苦に心に感ずるものがあります。

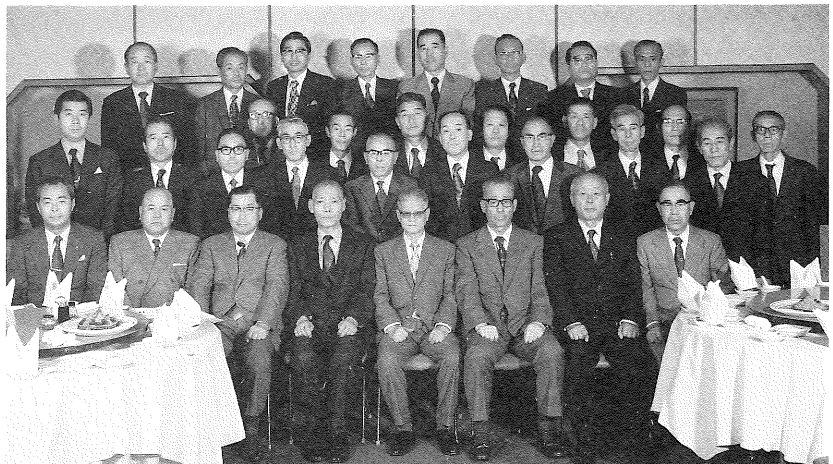
共通の目的意識があつて集団、群れとなり、その力の結果は算術的以上の好結果をもたらす。

ご存じの方も多々あるかと思いますが、八丁堀地区に八親会と呼ばれている組合員によるサークルがある。

より良い印刷をするために、よい企業にするために……広く知識と情報を集め、また鋭気を養うために楽しく遊ぶ。これを共通の目的意識、人生の意義?として、活潑な行動をしておりますが、一九四五年焦土の中に、溶けた鉛(活字)をみて、近隣同業互いに手を携えて立ち上がるべく群れづくりをはじめたと聞く。

資力もなく、設備もなく、無力ながらも業としてなさねばならない意欲は、資金や設備の調達、共同利用等々により逐次その効果を表し今日の姿になっている。

しかしここで重要なことは、印刷人として共通の意識をもち、また近隣相信じていたからだ



八親会創立第25周年記念 1975年10月

ろう。為さねばならないとするための高邁な心と、群れの一員としての謙虚な姿勢が、定時の集会、小資金を集めての活用と企業支援、経営のための他産業の見学や研究、スポーツ、文化・芸能による自己研鑽等々、メンバーによっては三世代にも及び、転地されても何故かサークルから去りがたく、あるいは魅せられての新規参

加や他地区からの参入も続々としている。

限らない印刷技術の変革に対応しながら、八丁堀地区の群れは、企業の維持発展とともに、相互信頼の絆のもと、一層親睦を深めいつまでもこの道を作り続けると信じ、その一員として及ばずながら努力しなければならぬ。

追記ながら、ギネスブックに記してもらえたらとおこがましく思っていること、それはゴルフの研修会が、この夏頃に四〇〇回を迎えようとしています。参加者全員揃ってエースを出す夢を見ながら……

第一回から参加のオールドメンバーに健勝の賛辞を贈り、喜々として闊歩する後姿に二代・三代目のメンバーは刮目して見なければなるまい。自分の姿はわからないが、前途難多し、されどその後には喜びとあらたな希望も湧いてくる、勇気をもって進みましょう。八親会の栄光のために。

協和美術印刷(株) 浅野友一

湊 地区

創刊当時の懇親旅行と

その後の足取り

「京橋の印刷一〇〇号記念号の地区割当の一頁、何とかして下さい」と地区長から電話が入ったのが、締切日を三、四日過ぎた頃であった。急に言われても困る。二、三心当りの人に頼んでも軽く断わられて了う。もう、当時を語ってくれる人達もいない。自分で何とかするより、

●湊地区懇親旅行の足取り●

昭和五十三年	山形 上の山温泉(羽黒山)
昭和五十四年	浜松 館山寺温泉
昭和五十五年	四国 琴平 徳島
昭和五十六年	四萬温泉
昭和五十七年	若狭 天の橋頂立
昭和五十八年	南紀州 勝浦 白浜
昭和五十九年	十和田湖
昭和六十年	木曾 恵那峡
昭和六十一年	山口 津和野 秋芳洞
昭和六十二年	岩手 三陸海岸
昭和六十三年	西伊豆 土肥温泉
平成元年	山陰 松江 鳥取
平成二年	台湾旅行(三泊四日)
平成三年	大島、稲取
平成四年	九州 宮崎 鹿児島(二泊三日)
平成五年	能登 和倉温泉(加賀屋)
平成六年	新潟 村杉温泉
平成七年	伊勢志摩
平成八年	黒部アルペンルート
平成九年	四国 足摺岬



しようがないと決める。

昭和五十三年の創刊当時は、支部長もされた事のある田島さんが地区長の時で、私も幹事の一人としてお手伝いしていた。

その時の旅行の写真をやっと探し出して見ると、参加者の多いのと、顔ぶれの違うのに驚く。三十名以上写っている中で、今も旅行に参加している人が六、七名、あとは亡くなったり、辞めてしまったり、移転してしまったりで、名前さえも忘れた人達も多い。

去年の旅行の参加者が、例年より特に少なかったが十四名、組合員も六十社以上あった時に比べれば、四十社前後になった今では、止むを得ない事かも知れない。

昭和四十年代までは年二回、春、秋の旅行で、関東周辺が多かったが、五十年頃から年一回になった。費用の点と、行先に困り出したこともあった。新幹線も出来、高速道路も良くなり、遠出するのを容易にした。航空機を利用することも多くなった。

参加者の中に、今でも語り草の人がいる。バス旅行の時、朝の集合場所に来た時もう既に酔払っていて、帰って来るまで酔い続けていた酒豪もいたり、又一升瓶をぶらさげて、飲み乍ら觀光して歩き、あげくの果、仲間からはぐれて幹事を困らせたり、夜、イビキがすごくて同室になったら悲劇だと云われた御仁も居たが、今はもう亡くなっていない。

終りに、この二十年間の旅行を列記しておく。

新川地区

昌平堂印刷(株) 伊森淳太

二〇〇年の歴史、 長い様でも短い様でも

京橋の印刷が一〇〇号との事、一号の記事の発刊した昭和五十三年から二十年を経て、歴史の流れ、又、新川地区の諸先輩の組合活動を考えさせられ筆のまま書きたいと思います。

一号発刊頁に「創刊号発刊によせて」と伊坂印刷の先代故伊坂一夫氏が、又、「支部発刊を祝す」と先代荻野印刷(株)故荻野義博氏、御兩名の文章と写真が掲載されています。私の父は、戦前より新富で昌平堂インキ店を経営しており、よく中学生の頃、手伝いをたのまれて荻野さんの所に納品などした記憶がありますので大変なつかしく思いました。

昭和五十三年には高千穂印刷の小山英美氏は副支部長で五十四歳ぐらい(歳が違いましたら申し訳ありません)、又、私と同級生の銀座地区の長島印刷の長崎伸行氏も四十六歳で副支部長、今の彼の白髪頭には考えられない若々しい二枚目の写真が印刷されておりました。

当時は新川地区は地区長は久栄社社長田島一弥氏でありました。地区幹事には(株)七映社長(故) 柏原多久生氏、昭和印刷社長、現(株)谷島の初代社長(故) 谷島正次郎氏、松栄印刷社長(故) 飯塚松箔氏、宇野印刷の宇野賢一氏現在は宇野一男社長、正明堂会津印刷の会津勇氏現

在会津正明社長等各先輩の方々でございました。

昭和五十五年当時新川地区は組合員五十五社で、京橋支部の中でも大世帯。昭和五十年頃は第一次構造改善スクラップビルドと云う事でワールド化に向けて古い機械はスクラップ、新しい生産性高い機械に変えようと運動が起こり、中央印刷センター協同組合が設立され、初代理事長に私の兄がなっておりますが、新川地区長になり五十歳台のなつかしい写真が掲載されておりました。

その時の地区幹事は小島印刷の小島正義さん、伊坂印刷の常務取締役田谷欽吾さん、共立印刷の船尾義道さん、政弘社の野村道生さん、株式会社共盛堂の中村脩三さん、新川地区で旅行をすると今勉強しているといつて笛を持参していた故人になられた佐野敏夫さん、の六名の方々でした。

五十六年の訃報には九月十二日先代三好印刷三好正殿が六十七歳で、元歌手であるとの事は聞いておりましたが私の家が世田谷ですぐ近くのマンションに往年の歌手赤坂小梅が住んでおり、娘さんが三好さんとは戦前より生前までおつきあいしておりましたと聞いて驚きました。五十七年には(株)大竹印刷所大竹次郎氏が地区長で二回目の地区長さんです。昭和二十二年より石沢、瀬戸、荻野三支部長の副支部長をつとめ、忙しい社業のかたわら歴任していただいております。その時の新友会の旅行は二十五名で出雲、隠岐の旅行。私も松葉蟹が食べられ満足

しておりましたら、翌日バスのガイドが「あさってから解禁なんです」といわれたので、では昨日食べた蟹は去年の蟹だとながかりした記憶がありました。帰りの日、出雲空港は天候不良のため、出発が二時間十五分遅れ、大阪空港での乗り継ぎに、我々一行のためにバスが用意されやつの思いで羽田行のジャンボを予定より二十五分遅らせて出発させたという、今となっては楽しい思い出があります。

昭和五十九年には㈱中央社の代表取締役の小泉健次氏（故人）が地区長で、その時の幹事に渡辺印刷㈱代表取締役の渡辺文男氏（本年二月故人）がおりました。

七月の納涼会では屋形船船宿「あみ清」で吾妻橋から舟遊び。小泉社長は大変粋な方で、着物の着流しでおいでになりました。三十六名の参加者でした。

又幹事の渡辺氏は釣りと写真のマニアで、私同様旅行好き、晩年は油絵など多趣味な方でした。新友会で「南紀グルメ旅行」をするという和下見をするという奥さんと二人で行き、串本和田金別館、新宮丸新、伊勢松坂和田金等で昼食。宿泊は第一日勝浦温泉「越之湯」第二日目は「ホテル志摩石亭」での懐石料理と誠にすばらしい料理と楽しい旅を企画されました。六十一年は三好印刷の三好社長が地区長。この年には、荒井幹事の尊父(株)荒井美術の荒井政吉氏、伊坂美術印刷(株)の伊坂一夫顧問が亡くなられております。

六十三年には新川地区長は伊坂美術印刷(株)

代表取締役伊坂元延氏でした。二期、地区長をお願い致しまして大変御苦労様でした。この頃より新友会の旅行は大変中国に縁深いものになり、第一回目は台湾、宇野印刷(株)代表取締役宇野一男氏の地区長の時は、滅多に行けないが良いという事で北京、平成七年荻野印刷(株)、荻野耕作氏地区長の時には上海、杭州。平成九年私の地区長の時には返還後の香港と桂林の川下りなど新川地区の旅行もインターナショナルになってまいりました。

こんな事など想い出しながら書いておりますといまさらの様に二十年の歳月は長い様でもあり短くも感じ感無量の様な懐かしい想い出であります。

月島地区

(株)長正社 増田勝彦

良く働き、良く遊び
豪傑揃いの親父達

「月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり」と書物に書いてあるが年月の経つのは本当に早いものだと感じる今日このごろである。

私が親父から経営を任されたのは昭和四十二年の初春であったが、組合の方へは親父が出ていた。その当時の社長さん達は皆、小さい事にはこだわらない豪傑の集まりであり、また人間が大きかった。石井印刷の石井社長、渡辺印刷の渡辺社長、誠文社印刷の荒川社長、岸印刷の



岸社長、安西印刷の安西社長、美山堂印刷の鎮目社長、岡良印刷の岡田社長、長正社印刷の増田社長等々…。

親睦旅行に行つて十分慰安して東京に帰り、また打上げをその日にやるとか。京橋支部の新年会からタクシーを連ねて東京に帰ってきた後銀座で打上げをする…。

遊ぶ時は徹底的に遊び、仕事の時は十分に働いていた。ポリシーがあり、怖い存在の親父達であった。

世間では後継者がいないと嘆く人達が多いな

かであるが、月島地区では、二代目、三代目と
なっている。岸印刷の若旦那、誠文社の若旦那
アンザイの若旦那、長正社の若旦那とそれぞれ
親父の後姿を見ながら育ち、それぞれの社の中
堅から中心的になり、積極的に経営に携わって
いるのを見ると喜ばしいかぎりである。

平成10年新年臨時総会

2月2日(月)
於・銀座東急ホテル

2月2日(月)、午後6時より、銀座東急ホテル
に於いて、平成10年京橋支部新年臨時総会が開
催されました。

開会に先立ち「京橋の印刷」100号記念特集号
の表紙を飾る、出席者全員での集合写真を撮影
した後、総会は定刻6時、永井副支部長の司会
により開会されました。先ず開会のことばを榎
本副支部長が述べ、続いて十文字支部長が挨拶
に立ち、「私達日本人にとって昨年は、誠に恥多
き一年でございましたが、それが未だ止まず、
年を越しても相変わらずの不祥事が続いており
ます。国の勢いが止まりますと、色々な恥部が
露われてくるものようです。社会に重い責任
を持つ人々の倫理感の欠如ほど私達の矜持を萎
えさせ、私達の心を痛めつけるものはありませ
ん。

さて、京橋支部も大正12年に産声をあげまし
てから、本年が3/4世紀、創立75周年という
歴史を数えることになりました。その間先人の

若い力を二十一世紀に向けて、頑張つてほし
い。

この写真は安西社長より拝借いたしました。
安西社長は四月で八十四歳、今もなお元気で活
躍しております。

ご苦労や遺産を糧としながら東印工組の中核と
して今日まで辿りついたのが実感かと存じま
す。

経営環境も決して良好とはいえませんが、こ
こ一、二年の皆様方の電子化への真摯な取組み
も目を見はるものがあります。本日は新年臨時
総会であります。次期支部長候補者の推薦経過
報告という大きな議題があり後ほど推薦委員長
より経過報告がございます。また、5月18日に
予定しております通常総会まで残っております
仕事も数多くありますが、最後まで我々の執行
部をお見捨てなきようお願い申し上げます。新年の
ご挨拶といたします。」との挨拶がありました。

次に本総会の議事である「次期役員推薦委員
会経過報告」へと移り、推薦委員長の石澤幸委
員長が壇上に立ち、次のように経過報告をされ
ました。「昨年の通常総会におきまして、支部
規定第12条により、顧問・相談役・参与から8
名、現執行部から3名、計11名が次期役員推薦

委員の指名を受けました。

11月15日に第1回の推薦委員会を開催いたし
ました。第2回の推薦委員会を11月25日に開催
いたしました。次期支部長候補者には2期副支
部長を経験され、現在は組合本部の管理・営業
教育委員会の副委員長として活躍されておら
れ、人格・識見ともに優れたミズノプリテック
株式会社社長、水野雅生さんを次期支部長候補
に推薦することを満場一致で決定し、水野さん
に内諾を得ております。

また、副支部長・監査につきましては、次期
支部長候補者の意向と各地区におけるご意向
を踏まえて、総会までに推薦をいたしたいと
思っております。組合本部におきましても改選



十文字支部長挨拶

ということですが、当支部に對しまして常務理事の要請があると思いますが、常務理事の候補者には、前支部長で本部の理事であります誠文社印刷株式会社社長荒川龍治さんと、現支部長の十文字康雄さんを候補者として推薦することで本人の内諾を得ております。

以上がこれまでの経過報告ですが、皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。」と報告されました。

続いて来賓挨拶では、東印工組副理事長の田島一弥氏より次のような挨拶がありました。

「ご指名をいただきましたので一言ご挨拶申し上げます。只今、石澤推薦委員長のご発表によりますと、本部への常務理事の推薦には前支部長の荒川さん、現支部長の十文字さんを推薦していただき厚く御礼申し上げます。また、次期支部長には水野さんをご推薦されましたことをお慶び申し上げます。荒川さん、十文字さんとも支部長として大変ご活躍されましたし、また本部の委員会にもご出席され色々ご尽力いただきました。水野さんも東印工組では大変有名な方でいらっしやいますし、各団体の長、役員としてもご活躍されております。京橋支部は大変人材が揃っておられますが、ただ一つ欠点と言えば、皆さん奥ゆかしいと言いますか、仲々役員に出て来られなくて、推薦されるかたもお困りのようですが、東印工組22支部の中では最大の支部でございます。その最大の支部としてリーダーシップを発揮していただくためにも、是非積極的に役員になっていただけるよう切に



水野次期支部長

お願いする次第でございます。

本部の事業運営につきましては、支部長始め執行部の方々、また支部の皆様方には大変ご尽力いただいております。厚く御礼申し上げます。お蔭様で本部の事業も滞りなく運営されておりますが、ただ一つ残念なのは、こういったご時世でございますので、組合員の脱退が続いております。これも経営不振や倒産といったものが主な内容でございます。そういう意味でも、さらに組織の強化という点では是非皆様方にも加入・増強に對してのお力添えをお願いする次第でございます。ところで、ご承知の通り大変な不況でございますし、加えてマルチメディアの時代、産業革命以来のメディア革命と言われる時代、更に大競争の時代、こういった時に

はどうやって生き抜くかというのが一番問題でございますが、何と云っても人材がいるかいないかということになるかと思われれます。企業は人なり、と言いますし、企業そのものがその点に力を入れていく必要があるかと思われれます。教育という点につきましては、一番苦労されるのは経営者、社長自身だと思います。その難しさを一番判っていらっしやるのも社長だと思えます。教育の環境をつくるのはそう難しいことではないのですが、従業員に意欲を持ってそれを受け入れさせることが一番難しい問題だと思えます。

そういう点では、どんな素晴らしい本も、どんな素晴らしい先生をお呼びしても、従業員がそれを血してもらえぬか、肉してもらえぬかが問題で、知識は与えられても、やる気・意欲を与えることは中々できません。それが出来るのは経営者・社長自身だと思います。是非社長自身が変身し、従業員に意欲を持たせる工夫をしていただきたいと思えます。小規模の場合には社長自身一人変身すればその企業を引っ張って行けますけれども、ある程度の規模以上になれば広い中から人材を求めて行かなければなりません。是非従業員の意欲を持たせることを社長自身がやっていたいただきたいと思えます。

よく格言では、「水辺に馬は連れて行けるけれども、馬に水は飲ませられない。」と言う話がございますが、まさに意欲のない者にはそういうことが難しいという格言でございます。是非その点を考え、知恵をもって意欲を持たせるよ

うに努力していただき、組合での色々な事業に参加していただきたいと思います。組合でも色々々と教育事業を行っております。また、昨年は当支部も中央区のお力を借りて日本橋支部さんと共催で電子化教育を行っております。そういう点では色々講演会や研修会もあります。意欲を持たせて是非参加して、こぞって21世紀に少なくとも京橋支部の各企業は落伍することなく行けるようにしていきたいと願っております。

また、東印工組の方では色々事業は行っておりますけれども、こういう時期におきましては、組合の基本姿勢である共に栄える工夫というものをこれからもっとと力を入れて進めて行かなければならないと思っております。組合には14の常設委員会がございます。構造改善委員会をはじめ、教育或いは現在当支部から推薦されて出ておられます篠倉常務理事も労務委員会の委員長として活躍されております。今までない委員長として大変新風を吹き込んでおられますし、委員会で支部の意見をどんどん反映させる。またこの委員会が一番お互いに情報交換して、工夫をして知恵を出していく場でもあろうかと思っております。この委員会には各支部から委員を出されておりますので、積極的に支部の声を大いに反映させるようにして行っていたきたい。また、委員会が出された意見交換・情報等を支部へ持ち帰って、また検討していただく、そういう様にお互いに力を合わせていって、はじめて共に栄える工夫をしていけるので

はないでしょうか。是非、今後共よろしくご尽力だけますようお願い申し上げます。」と挨拶されました。

続いての来賓挨拶では矢田美英中央区長、平林智司中央区工団連会長よりそれぞれ年頭の挨拶があり、総会最後は福田副支部長が閉会のことばを述べ大拍手を以て終了となりました。

引続き新年宴会となり、青柳副支部長と山崎副支部長が司会、進行をつとめ、先ず、十文字支部長が挨拶を述べ、関連業界代表挨拶では東製工組京橋支部の岸田俊辰氏が挨拶をされまし

京橋支部

ホームページ制作余話

京青会 小宮山 貴史

平成9年4月、京橋支部十文字支部長より京青会へ支部ホームページ作成の協力要請があり10月の開設を目指し行動を起こした。ホームページの掲載内容についても京青会へ一任されコンテンツづくりからのスタートとなり急遽6月の研修会を支部ホームページ作成の企画会議とし会員に集まって頂き協議を重ねた。

その企画会議は会員の紹介であるホームページ等を作成している会社、(株)スリーライトのご協力により制作現場を見学させて頂き、その後会議室をお借りしプロの意見を聞きながらの打

た。年頭の乾杯は東印工組常務理事の篠倉正信氏とともに次期支部長候補者として推薦総会で発表された水野雅生氏と本部役員改選に伴う常務理事候補として推薦された荒川龍治氏と十文字支部長が壇上に上げられ四名の方揃い踏みで声高らかに音頭をとり一同これに和して杯を挙げました。

次に本日出席された関連業界35社40名の方々が壇上で紹介され和やかに歓談へと移りました。盛り上がった祝宴も終りに近づき、支部顧問の齋藤喜徳様の中締めで散会となりました。

ち合わせとなった。当初の切り詰めた予算での話し合いではコンテンツの検討だけではなくその取材についても京青会で動かなければならないということ論議を呼んだ。掲載内容としては京橋支部の紹介、支部組合員情報、町の情報(中央区の案内)、東印工組本部が発行しているデジタル文例集「オンデマンド800」の掲載等いろいろとアイデアも出たが、町の情報については情報の収集や更新という手間の問題、また、「オンデマンド800」についても著作権の問題があり断念せざる得なかった。この間京青会ではプロジェクトチームを組み何回か会合をもったが一向に話が進まず時間が経過した。

再度支部から要請がありその中で中央区からの助成金制度の活用等の話もあり過日ご協力を頂いた。しかし、コンテンツについては当方で提供しなければならないという問題がまだあり、これについてはグループで協議をするより

3月2日のホームページお披露目



も全権を一任出来る担当1名を決め「一日も早くホームページを開設する」ということを最優先させた。今回その作成に当って頂いたのは京青会幹事の(株)久栄社専務田島氏でありその労に感謝をしたい。最近よく耳にする「インターネットバブル」という言葉があるが今回の京橋支部ホームページが単なる流行にとどまらず、支部会員の皆様のお役に立てるようにしていくためにコンテンツの見直し、更新等を重ね、磨き上げていくという努力が今後のホームページ維持運営に関わっていく新たな目標となっていくことと思う。



支部の動き

12月4日(木) 本部支部長会(15時〜)於・本部会議室 十文字支部長出席

12月8日(月) 顧問・相談役・参与の会(17時30分〜19時30分)於・銀座東急ホテル「羽衣の間」会費1万円

1月9日(金) 中央区工団連「新年会」(18時〜)於・中央会館

1月13日(火) 本部「98新春のつどい」(17時30分〜19時30分)於・東京プリンスホテル

1月21日(水) 東製工組京橋支部「新年研修会」於・銀座東急ホテル(18時〜) 十文字支部長出席

1月21日(水) 東印工組日本橋支部「新年会」於・ロイヤルパークホテル(18時〜)

十文字支部長出席

1月23日(金) 東印工組足立支部「40周年記念式典」十文字支部長出席

1月26日(月) 部長・監査・地区長会(11時〜14時30分)於・支部会議室
1、新年臨時総会開催日当日の役割について

2、各地区・次期役員選出状況について
3、支部ホームページ開設準備経過報告について

4、5月18日(月)の支部通常総会開催に向けての諸準備について

5、「京橋の印刷」100号記念特集号の発行

について

1月28日(水) 中央厚生事業協同組合「新年懇親会」於・人形町北浜本店(18時)

十文字支部長出席

2月2日(月) 支部・新年臨時総会開催(18時)

於・銀座東急ホテル2階グランドホール

司会

永井副支部長

。開会のことば

榎本副支部長

。挨拶

十文字支部長

。議事

次期役員推薦委員会経過報告

推薦委員長 石澤 幸殿

その他

。来賓挨拶

東印工組副理事長

田島一彌殿

中央区長

矢田美英殿

中央区工団連会長

平林智司殿

。閉会のことば

福田副支部長

—新年宴会次第(午後6時30分予定)

。進行

青柳副支部長

。挨拶

山崎副支部長

。関連業界代表

十文字支部長

。東印工組京橋支部長

岸田俊辰殿

。東印工組常務理事

篠倉正信殿

。関連業界紹介

。一 欽 談

。中 締

京橋支部顧問

斎藤喜徳殿

2月5日(木) 本部支部長会(15時) 於・本部

会議室 十文字支部長出席

2月6日(金) 東印工組文京支部「50周年記念式典」十文字支部長出席

2月16日(月) 「京橋の印刷」100周年記念特集号/座談会(12時~14時30分) 於・支部会議室 出席者(50音順)

大竹次郎様、神林克明様、久保田幸一郎様、白橋達夫様、新保義人様、瀬戸恭平様、土井嘉光様、水野雅生様執行部より十文字支部長、榎本副支部長

2月19日(木) 本部「電子化教育研修会」平成10年度方針を受けての京橋支部対応検討会(13時30分) 於・支部会議室 十文字支部長、榎本副支部長、福田副支部長、次期支部長予定の水野雅生氏

2月19日(木) 支部ホームページ本立上げ前の仮実演会(14時30分) 於・支部会議室

2月20日(土) 中央区中小企業商工業関係者表彰式(15時) 於・中央会館 十文字支部長 他出席

2月28日(土) 部長・監査・地区長会(16時15分) 於・奥湯河原、山翠楼

1、5月18日(月)支部通常総会開催に向けての諸準備について

2、平成10年度「電子化教育研修会」の開催について

3、各地区、次期役員選出結果について

4、「京橋の印刷」100号(記念特集号)の発行について

3月2日(月) 京橋支部ホームページ・オープン

ングセラモニー(13時30分) 於・支部会議室 出席者・京青会・中央区・支部役員

3月5日(木) 4支部(京橋支部、日本橋支部、千代田支部、文京支部) 合同「電子化教育研修会」開催の打ち合せ会(13時) 於・支部会議室

支部員の異動

加入組合員

湊地区、野口印刷、野口春雄氏 11月

。脱退組合員

。大誠印刷(株)、大川利夫氏(湊地区) 1月

。金子特殊印刷(株)、金子幸雄氏(新富地区) 2月

お悔やみ申し上げます

▼湊地区

(株)あーと・そうご社長御母堂、石塚圭子殿御逝去(12月)

▼銀座地区

大秀印刷(株)社長、保木宏勝殿御逝去(1月)

▼八丁堀地区

明文社印刷(株)社長、村上繁夫殿御逝去(2月)

▼新川地区

(株)渡辺印刷(株)社長、渡辺文男殿御逝去(2月)

お知らせ

平成10年度電子化教育事業実施要項のご案内

すでに支部組合員の皆様にはご案内いたしました。前年度に引き続き、都助成による10年度電子化教育事業が下記の要項にて実施される運びとなりました。本年度は極め細かく配慮されておりますので、ご都合のよいコース・日時をご選定の上、是非とも多数の皆様のご参加をお願い申し上げます。

1. 経営幹部セミナー(研修時間：3時間)

- (1) 募集人員 18名(支部割当)
- (2) 日 時 9月8日(火) 午後6時～午後9時
- (3) 会 場 ㈱千代田マシナリー(千代田区猿楽町)
- (4) 費 用 7,000円
- (5) 締 切 日 8月25日(火)

2. 啓蒙入門コース(研修時間：7時間)

- (1) 募集人員 50名(支部割当=各回5名×10回)
- (2) 日 時 以下のうちご都合のよい日 各日とも午前10時～午後6時(休憩1時間)
4/7(火)、16(木)、27(月)、5/22(金)、6/5(金)、23(火)、29(月)、7/10(金)、15(水)、21(火)
- (3) 会 場 パブリッシングトレーニングセンター(西新宿)
- (4) 費 用 10,000円
- (5) 締 切 日 2週間前まで

3. 経営幹部・営業マントレーニング(初級)(研修時間：7時間)

- (1) 募集人員 37名(支部割当=5名×7回・2名×1回)
- (2) 日 時 以下のうちご都合のよい日 各日とも午前10時～午後6時(休憩1時間)

4/9(木)	5/15(金)	6/10(水)	6/30(火)	8/6(木)	9/10(木)	10/8(木)	2/4(木)
5名	5名	5名	5名	5名	5名	5名	2名

- (3) 会 場 成匠塾「WOTS」麹町教室
- (4) 費 用 15,000円
- (5) 締 切 日 2週間前まで

4. 経営幹部・営業マントレーニング(中級)(研修時間：7時間×2日間)

- (1) 募集人員 22名(支部割当=5名×4回・2名×1回)
- (2) 日 時 以下のうちご都合のよい2日間 各日とも午前10時～午後6時(休憩1時間)

5/19(火)、22(金)	8/19(水)、21(金)	8/26(水)、25(金)	10/21(水)、23(金)	2/17(水)、19(金)
5名	5名	5名	5名	2名

- (3) 会 場 成匠塾「WOTS」麹町教室
- (4) 費 用 30,000円
- (5) 締 切 日 2週間前まで

5. 実務者トレーニング(初級)(研修時間：7時間×2日間)

- (1) 募集人員 7名(支部割当=3名×2回・1名×1回)
- (2) 日 時 以下のうちご都合のよい2日間 各日とも午前10時～午後6時(休憩1時間)

5/11(月)、13(水)	12/7(月)、9(水)	3/1(月)、3(水)
3名	3名	1名

- (3) 会 場 パブリッシングトレーニングセンター(西新宿)
- (4) 費 用 28,000円
- (5) 締 切 日 2週間前まで

6. 実務者トレーニング(中級)(研修時間：7時間×4日間)

- (1) 募集人員 3名(支部割当)
- (2) 日 時 5月14日(木)、15日(金)、18日(月)、19日(火)の4日間 午前10時～午後6時(休憩1時間)
- (3) 会 場 パブリッシングトレーニングセンター(西新宿)
- (4) 費 用 56,000円
- (5) 4月30日(木)

編集後記にかえて

—百号発刊の楽屋裏話—

□新年の未だお屠蘇気分抜けやらぬ一月半ば、横田書記から「京橋の印刷」が百号になる旨告げられ、その場の返事は「あ、そう」止まりだったものの、あとで考えると百号とは大きなメモリアル、なにか形にしなければ、という訳であわてて記念特集号となった次第です。

□編集委員は執行部と地区長さん全員にお願いしよう。じゃあどんな内容にするとして、なるべく肩肘張らない読み易いほうが良いだろう。表紙はできればカラーにしよう。各地区の頁を設けて、地区内の思い出話やエピソードなど綴ってもらおう、テーマは問わずお好きなように。

□ところで一体、創刊号はいつ、だれの時代だったか知らん。支部に保管の支部報合冊本をひもとくと昭和53年、20年前の久保田支部長のとき。ではという訳で早速、十文字支部長と当時のお話を伺いに久保田さんを訪問したところ、曰く「昔のことだし、ほかにも沢山かわり苦労された方々がいらっしゃいますよ」との助言を得て、それでは座談会を開いて気楽にお話願おう、と相成った。

□表紙はどうする？さすが百号まで続くと、これはという材料はすでに使用済み。とつおいつ思案するうち次週が支部臨時総会であることに思い当たり、これをなにか利用できないか—看板つくって周りで皆んなで百号乾杯！この線でゆこう。早速ワープロうって、拡大コピーし、パネルで裏貼りを。カメラマンは？プロに頼むよりはキャストも制作もすべて自前でゆこう。山崎副支部長が倍版カメラを持っているとのことなので横田書記と二人で充分。銀座東急との総会の打ち合わせついでにロケハンも済まし、当日ご存じのとおり撮影風景となった。いまだから内実を明かすと、この撮影で撮れていたのがこの表紙を飾った倍版のたった一枚という冷や汗ものの綱渡り。

□そんなこんなで、ここに「京橋の印刷」100号をお手元におとどけいたします。読んで多少ともお楽しみ頂けたとしたら、それは京橋支部の多くの皆さんが語り、多くの皆さんが執筆して下さった結果です。

(E)

マルチメディア時代の支部をPR

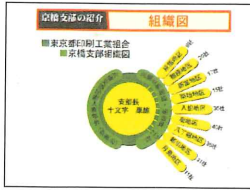
ホームページを開設!

東京都印刷工業組合京橋支部の、インターネット・ホームページが開設され、3月2日から情報提供を始めました。デジタルによるマルチメディア時代にふさわしい、私たちのPRです。

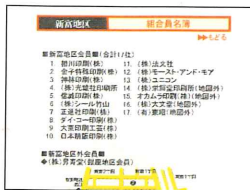
支部の紹介、組合員名簿、中央区の紹介、そして印刷工業発祥の地として、百年前の東京・日本を記録した「モースコレクション」等で構成されています。

「モースコレクション」は自由にダウンロードできるサービスページで、多くの訪問者を期待しています。またご意見・ご希望を伺うコーナーも用意されています。

今後とも随時内容を充実させ、多くの人々に利用されるホームページにしていきたいと考えています。組合員の方々もぜひアクセスして、事務局へご意見をお寄せ下さい。



<http://www.threelight.co.jp/kyobashi/>

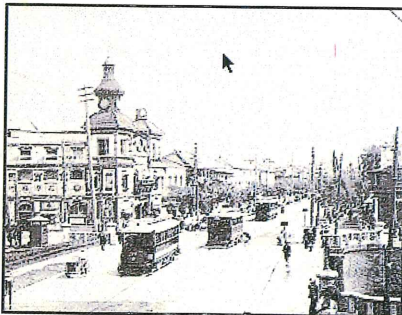


- 京橋支部の紹介
- 中央区の紹介
- 百年前の東京、日本
- ご意見・ご要望



東京の風景

東京の風景



3-銀座通り



モースとそのコレクション
ビーボディ・エッセックス博物館
モースコレクション
<写真>



写真等の利用(著作権)について

モースコレクションは、大森貝塚の発見者として有名なエドワード・シルベスター・モースが、日本に滞在した明治10年からの2年半で収集した、日本人の生活文化の民具や写真等です。アメリカの博物館で保管展示されているほか、一部は東京江戸博物館等で展示され、近代日本の貴重な資料としての評価を受けています。